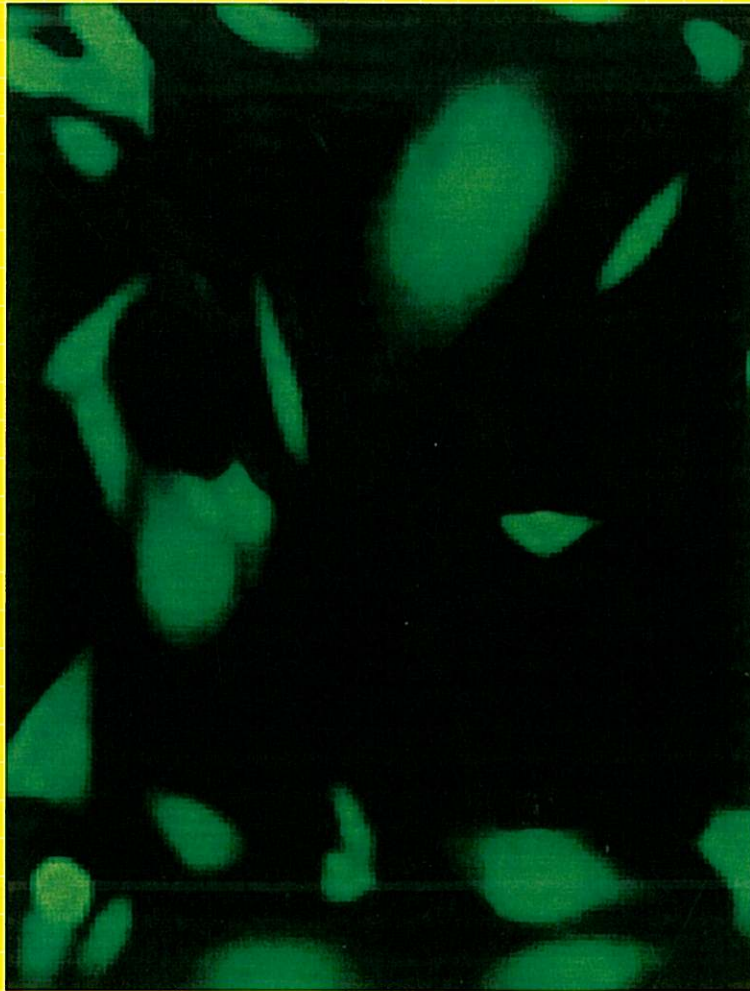


日本歯科評論 1

THE NIPPON DENTAL REVIEW

January 2011 No.819 Vol.71(1)



徳島大学大学院 ヘルスバイオサイエンス研究部 口腔顎顔面補綴学分野
長尾大輔先生・市川哲雄先生 <私の研究室から>本文9頁

〈特集〉

これだけは外せない 診査・診断のスタンダード

——病態の背景をいかに読み解くか？

福島俊士・伊藤公一・鈴木 尚・宮本泰和・嘉ノ海龍三・徳永哲彦ほか

Point of View 新連載

まずはパーシャルデンチャーを得意になろう！——クラスプデンチャーを中心に

五十嵐順正ほか

HYORON

<http://www.hyoron.co.jp>

まつりごと

政とは祭り事なり

なかはら えつ お
中原 悦夫

医療法人社団協立歯科 クリニック デュボワ
〒100-0011 東京都千代田区内幸町1-1-1 帝国ホテルプラザ4階



アルプス山麓のドイツの小さな村、オーバーアマガウには、10年に一度、村人総出で“キリスト受難劇”を上演する300年以上も続く音楽祭がある。2010年はその41回目の年にあたった。

一方、平城遷都1300年祭に沸いた日本の奈良、「お水取り」の名で知られる東大寺二月堂の“修二会（しゅにえ）”は1259回目を終えた。“キリスト受難劇”は366年間受け継がれており、“修二会”は実に1259年間一度も中止されたことがない。祭り事は、古今東西継続して受け継がれてこそ、人類の普遍的価値が育まれる。2011年も早いものでミレニアムを迎えてから10年が過ぎ去り、21世紀も1割を終えたことになる。

“継続”の偉大さ

キリスト受難劇の歴史は1633年に始まる。当時ペストが大流行し、オーバーアマガウでも多数の死者が出た。その際、生き残った人々は「も

し絶滅から免れたならば、私たちの主イエス・キリストの苦難と死と復活の劇を演じます」と誓いを立てた。事実それ以降は、ペストで死亡した住民はいなかったという。そして、1634年の初演で彼らは最初の約束を果たした。

その後も上演は続けられ、1680年の6回目からは10年に一度となり、1770年と第二次世界大戦中の1940年の二度の中止以外は、今日まで続いている。劇場は、1930年には既に5,200席の大劇場に改築され、現在では6,000席になっている。劇にはこの村の出身者しか参加することができず、村に嫁いでも20年以上住んでいないと出演できない。上演期間中は2,000人以上の村人が毎日出演し、上演時間は前半2時間30分、後半2時間30分となっていたが、30分ずつ延びて結局6時間である。前半が終わって3時間の休憩中は、村人も各々の仕事に戻り、ホテルやレストランで夕食の準備や、おみやげ物

を売っている。そしてまた、後半の劇に出演するために劇場に戻っていく。演じるほうも大変だが、観るほうも大変である。

私も2010年の音楽祭を鑑賞したが、雨はしのげても基本的にオープンホールなので、真夏なのに夜の気温は10℃以下に下がり、6時間もの間、寒さと時差ボケとの戦いに“受難劇”が文字どおり身にしみる。観劇中は時折意識が遠のきそうになる。朦朧としながら、ペストの恐怖に怯えたこの村の先祖の誓いのときから現代に至るまでを俯瞰していると、いつの間にか“キリスト受難劇”に東大寺の“修二会”が被っていた。

東大寺の修二会の本行は、3月1日から14日間毎日行われる。奈良時代には、天災や疫病や反乱は国家の病氣と考えられ、それらを取り除いて、鎮護国家・天下泰安・風雨順時・五穀豊穰・万民快樂など、人々の幸福を願う行事として始められ



た。特に12日には3万人もの観客が集まるが、お堂内では翌朝4時くらいまで本行が続けられ、その様子はまさにオペラに値する。

しかし、夢心地の意識はいつしか邪な計算もしていた。これを祭り事の“経済効果”と名打つと語りやすいので、そうすることにしよう。

祭り事（政）の経済効果

キリスト受難劇は、5月から10月まで週5日上演され、音楽祭のある年には、人口5,000人の村に世界中から50万人以上の観客が押し寄せる。また、鑑賞券はホテルの部屋に付いてくるので、この村に1泊しなければ観劇できない。客席のランクはホテルのランクにリンクし、やっとの思いで奮発して手に入れた席は、比較的前方のいい席だった。1泊2食、鑑賞券付きの値段は1人なんと900ユーロ！

10年に一度といえども、この年に人口5,000人の小さな村に落とされ

る金額は円換算で数百億、大規模な経済効果があるわけである。普段は冬の間、スキー客を迎える程度の村にとって、10年に一度の大きなボーナスになっている。この祭り事のために3年前から準備が進められ、また、上演の年には、他の都市で暮らすこの村の出身者が1年間の休暇を取って戻ってくるほどである。何よりも村の活性化に寄与しているところが大きく、“オーバーアマガウ”は全世界に報道されている。

*

医療行政はまさに政である。しかし、長期展望がない。かつての療養型病床群への制度誘導の後、10年足らずで介護保険制度により揺さぶられる病院経営、訪問歯科診療の問題、医師や歯科医師の需給バランス問題、そして今度は押し寄せる中国人観光客を相手に医療ツーリズムを推進する、経産省と厚労省のかみ合わない縦割り行政。医療問題は、われわれ医療従事者にとっても国民に

とってもまさしく国家の難題だ。

環境問題しかり、われわれはいつから己の未来しか考えられなくなってしまったのだろうか。子孫に受け継がれるような、長期継続可能なビジョンを待ち得ないのだろうか。大きな天災や国家の危機に直面しない限り、「祭り事」を起こすに値する長期的国家ビジョンである「政」は成立しないのであろうか。

21世紀の最初の10年は、かつてベスタの危機にさらされたオーバーアマガウの“キリスト受難劇”と、奈良時代には医療をも担っていた僧侶の大学である東大寺の“修二会”に触発され、“継続の力”を思いしらされた。せめて2011年は、今世紀末を意識した医療を想う年にしたい。